

深夜のコインランドリーには、僕のほかに誰もいなかった。

町外れにある小さくて古いコインランドリー。その代わり値段が安いから、よく利用しているけれど、大抵は近くにできた新しくて綺麗なコインランドリーに行くはずだった。

(それに今日は外は土砂降りの雨だし……)

傘を持ってきたのに、駅から走ってきてしまってスラックスの裾がびしょびしょだ。洗濯機に衣類を放り込んでスタートボタンを押して、あとはただ待つだけ。

スマホを見る気にもなれず、雨音を聞きながら壁際の椅子に腰を下ろしていた。

(洗濯終わるまでに、雨止んでくれればいいけど)

それから十分を過ぎた頃、扉が開いて男が入ってきた。ずぶ濡れだった。髪も、Tシャツの肩口も、

全部。それでも乱れた様子がなくて、どこか落ち着いて見えた。

大きなビニール袋を肩に担いで、頭のとっぺんから雨粒を垂らしながら。やや日焼けした肌に黒髪、Tシャツから透けて見える厚い胸板。店内をひと目で確認してから、視線がこちらに止まった。

(……顔がいいな)

第一印象はそれだった。

整った顔立ち、短く刈り込まれた黒髪、目鼻立ちがすっきりとまとまっている。年下だろうと思った。それだけで、なぜか少し気が緩んだ。

けれど顔よりも惹かれたのは、体だった。

Tシャツが雨で肌に張りついていて、その下の輪郭がわかってしまう。広い肩幅、厚い胸板。袖から覗く腕が、ただ太いだけじゃなくて、使い込まれた筋肉の質感を持っている。

(体、鍛えてるのか……)

目が合った。向こうが自然な動作で会釈したので、僕も小さく頷いた。

「雨、すごいですね」

「……急に降り出したな」

声のトーンが低くて穏やかで、思っていたより話しやすかった。距離感が悪くなかった。

雨の話や、コインランドリーの待ち時間の話をした。そのうち自然と名前を覚えてもらって、匡希というらしかった。

ひとしきり話してから、会話がふっと途切れた。ガタガタ、ガタガタと床に振動が響き始めた瞬間、匡希が椅子から腰を浮かせ、立ち上がった。

「まだ時間かかりますよね。ちょっと暇じゃないですか？」

「まあ、そうだな……」

「なら、触っていいですか？」

なにを言われたのか、一瞬わからなかった。

「じゃあ触りますね」

(……は)

聞き返す間も与えられずに、大きな手が膝の上に
乗ってきた。

スラックスの上から、ただ置かれただけ。それだ
けなのに、全身の産毛が逆立つような感覚がした。

(ちょっと待て。触るって、僕に……?)

頭の中でぐるぐると言葉を探すのに、声が出な
かった。

怒るべきか、笑って誤魔化すべきか、立ち上がっ
て距離を取るべきか。何もかもが一瞬で頭をよぎっ
て、でも体はどれも選ばなかった。

ただ、固まっていた。

「嫌なら言ってくださいね」

軽い声だった。命令じゃない。確認でもない。「言えばいい」という事実だけを、さらっと置いていくような言い方だった。

(言えばいい……)

そうだ、言えばいい。言える。「なにをするんだ」とか「やめろ」とか、そのくらいの言葉は持っているはずだった。

けれど断る言葉を探しているうちに、手がゆっくりと動き始めた。スラックスの中心の方へ、少しずつ。荒々しくなかった。慌ててもいなかった。

「……っ、お前」

「ん？」

整った顔が思ったより近かった。目が合う。日焼けした肌、涼しげな目元。匡希は「どうしたんですか？」という顔をしていたけれど、手は止まらなかった。

「やめ……っ、ちょっと……ッ！」

「声、大きいですよ。雨降ってますけど、近くにコンビニあるし。外に聞こえたらまずくないですか」

外をちらっと見て、また正面を向く。雨は依然として激しかった。窓ガラスに雨粒がぶつかる音が絶え間なく続いている。

（そんな……っ。聞こえたら……っ！）

スラックスの上から、太ももに大きな手が触れてきた。

「ひっ……んっ」

押し当てるだけで動かない。それだけなのに、ぞわりと全身の産毛が逆立った。

ゆっくりと手が動き始めた。太ももの上を、スラックスの上から撫でるように。荒々しくない。急いでいない。熱を確かめるような、静かな動き。

「あ……っ！」

（やっ……布越しに、手が……っ！）

すりすり、と生地を隔てて太ももを撫でられる。
大きな手のひらが触れているだけなのに、その熱が
生地を通り越して肌まで届いてくる気がした。

「力、抜いてください。わかるんで」

ぼそっと匡希が言った。

（わかる、って……なにが……っ）

意味を考える前に、手が内腿のほうへ動いていた。
ゆっくりと、でも確実に。スラックスの内側に手が
差し込まれてくる。

「ちょ……っ！」

止める間もなかった。外の雨音が、急に大きく聞